

隨泉寺寺報

平成19年(2007年) 12月号 第448号

082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

報恩講法要

講師 法光寺住職 築田 哲雄師

講題 『念仏者の生き方』

(心の荒廃をどう克服するか)

『年くれし そのいとなみは 忘られて

あらぬ様なる いそぎをぞする』 [玉葉2060] 西行法師

【通釈】年の暮れはいろんなことが忙しくて、毎日の大切なことが忘れられて、特別なことのほうが大事になる。しかし毎日のことが・・・。

師走です。その言葉を聴いただけでも、何か忙しいように思えてきます。テレビや街角から聞こえてくる、あのジングルベルの響きが余計に気持ちを逸らせてしまいます。まるで12月の31日でこの世が終わってしまうような感覚です。

私も報恩講で毎日忙しくしています。忙しいという字は心が亡びると書きます。しかし12月31日の一日も1月1日の同じ一日です。時間が途切れるわけではありません。忙しさに追われて自分を失うことの無い様にしたいものです。

12月の法座予定

- 12月 9日……………掃除 平原西
- 12月14日昼席午後1時より……………報恩講法要
- 12月14日夜席午後7時より……………出張法座 平原西集会所
- 12月15日朝席午前10時より……………報恩講法要 おとぎ
- 12月15日昼席午後1時より……………報恩講法要
- 12月31日午後11時より……………除夜会引き続き修正会
- 1月 5日午後6時より……………門信徒会本部役員会

除夜会・修正会

12月31日は、隨泉寺恒例の除夜会と鐘撞き、引き続き修正会を行います。

年末には、是非、家の大掃除だけでなく、ご仏壇の大掃除、お墓の大掃除もおこなっていただきたいと思います。そして、大晦日には、1年間の報恩感謝をこめて、家族そろって、ご家庭のご仏壇にお参りされ隨泉寺までお出かけ下さい。

午後11時より、参詣者の皆様と一緒に、平成19年の最後のお勤めをして今年一年のお礼をいたします。その後、11時半ごろから大鐘の前でお勤めをして、住職、老院と除夜の鐘を撞きます。お参りされた方々すべての人に撞いて頂きます。皆さまもどうぞ、お参りください。1時過ぎ頃まで参詣者の皆さん全員に撞いていただきます。

新年を迎えた午前0時から新年のお勤め修正会を勤修いたします。これは、心新たに新年を迎えるという法要です。

ところで大晦日からお正月にかけては、毎年、おおぜいの方が初詣にお出かけになりますが、圧倒的に、神社にお参りされる方が多いようです。「今年も良い年でありますように、どうぞ、神様・仏様、よろしくお願ひします」とお願ひ事にお参りされる方がほとんどでしょう。しかし、初詣は、自らの信じるみ教えの宗教施設にお参りされるのが、本当だと思います。浄土真宗の門徒の方は、1年の始まりを、ご家庭のご仏壇に、打敷をかけ、お餅をお供えして、すがすがしい思いで「阿弥陀如来」の御前で、お参り致しましょう。それからお寺にお参りさせて頂き、読経し、仏様のお話を聞かせていただきますと、心が洗われ、日頃の日暮らしを見つめ直す機会になるのではないかと思います。仏様の前に座らせていただくだけで、気持ちがよいものです。

私たちは、いずれ、死にゆく限られた時間の中で生きておりますが、その中で、精一杯生きることが、私たちの勤めだと思ひます。

阿弥陀如来様は、いつも、私たちの事を心配し、心の支えになって下さっています。いつも仏様は、私の為にはたらいて下さっているのです。

これからも、お念仏申し、浄土への道を歩ませて頂きたいものです。一年のスタートには、是非、阿弥陀如来様の前にお参り致しましょう。阿弥陀様さまの前でこうした時間を過ごす。普段では話せないことや、お互いの思いをみんなで分かち合う、しかもできれば隨泉寺にお詣りしてご本尊阿弥陀様にご挨拶し、先祖さまのお墓にお参りしましょう。

修正会の法要は寺族全員で雅楽の奏楽でお勤めしたいと思ひています。お楽しみにお参り下さい。



東井 義雄カレンダー 12月 春を信じて 冬を生きている

ひたすらなる「信」
すべての葉をおとしてしまって 冬を生きている
雪やなぎ やまぶき もくれん 沙羅双樹 榎 あじさい
でも よくみると みんな
既に芽を用意している 蕾まで用意している
固く 固く その芽を 守り
固く 固く その蕾を 守りながら
まだまだまだ なかなか
やってこない 「春」を信じて
冬を 生きている
おがみたくなるような
植物たちの「信」の姿



喪中 - 年賀欠礼について -

今年もあとわずかとなり、「喪中につき年賀のご挨拶を欠礼します」というはがきを送られてくる季節となりました。毎年この便りをいただいたとき、亡くなられたことを初めて知り、愕然とすることもよくあります。

年賀状という習慣は日本の世界に誇る文化です。もう何年も顔も見たことの無い友人から一年に一度だけ年賀はがきを頂き、[あいつも元気か] と懐かしく思い出します。

郵政民営化で郵便局が民間になったとき、私は年賀状の文化がなくなってしまうのではないかと危惧いたしました。たった50円の一枚のハガキによって、懐かしいともやお世話になった人々と過ごした時間を思い出すことが出来る、場所や立場が変わっても、その貴重な時間を出来事をよみがえらせてくれる年賀状。ひょっとしたらその文化がなくなってしまうのではないかと。

ところで私は年賀状は喪中のおうちであろうが、[年賀欠礼] のハガキをいただいた人であろうが全部出すようにしています。年賀状というのは新年の挨拶だと思うからです。[昨年はお世話になりました。本年もよろしくお祈りします] という思いだからです。

この間あるホームページに次のような記事が載っていました。

『今年家族を亡くされた方は、年賀状を出さずに代わって喪中欠礼のはがきを出す方が

多いようです。

喪は、「喪に服する」と言われるように身内で亡くなった人があった時、それからある一定の期間その死を悼んで、華美なことをさげ謹慎することですが、日本では江戸時代の武家制度や明治初期には太政官令で服忌令があり父・母・夫なら13ヶ月、妻なら90日等細かく決められていました。

これには、人の死は穢れであり自分についた穢れを人に移さないという物忌みという面もありました。しかし、現在の社会状況では喪に服するという意識も希薄になっているようですが、この年賀欠礼は多くの方がそれをしてしています。

新年を迎えた、新しい年の始まりその喜びと希望は現代人にもやはり特別なときと受け止められています。だからこそ、喪に服しているひとはそこには関わらないように欠礼を出すということでしょうか。

さて、浄土真宗の教えを聞くとき、人の死は穢れであったり、その穢れが人に移るとは考えません。生あるものは常に死の不安と共に生きています。生きている不思議、生きていく尊さを、死という事実が教えてくれます。

その一方、大切な人を亡くした悲しみは、お祝いなど晴れがましい場へでることを遠慮したいと感じることも自然な人の思いであります。

また、大晦日と元旦では何が違うのでしょうか。

人がその生活の目安として月日を決めてその区切りを大切にしてきたことも理解が出来ます。しかし、いのちの不思議を思うときどんな一日もかけがいのない一日と過ごすことの大切さにも気づかされます。

私の祖母が10年ほど前になくなったときは、欠礼状も出しませんが年賀状も出しませんでした。

死は穢れではありませんが去年は一緒にいた人がいなくなった寂しさはありました。また毎年年賀状をやりとりする知人の中にもそのことを知っているからでしょうか「おめでとうとう」という賀状は遠慮されたようでした。

私はそのお正月が過ぎたとき「今年のお正月は少し寂しいお正月でした」と「寒中見舞い」ををだしました。

また、あるお寺からは「住職が往生しましたが死もまた我らなり、お念仏と歩む人生に穢れも物忌みも用としない、共に日々大切ないのちを生きていく」という旨の年賀状をいただきました。

悲しみを持ったひと、そのことを知っている人、そのお互いが思いやる心で書かれたものであれば、喪中の欠礼状であろうと賀状であろうとその思いは届くと思います。有賀 良雄 POSTEIOS研究会コラムより』

